W-3-2 自己比喩とカテゴリー化：「にすぎる」と「にすぎない」の否定的評価

東京大学大学院　佐藤らな

ranasato877@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

1. はじめに

（1）のような格言に限らず、「X は Y にすぎない」という形式は、ごく一般的に用いられている（佐藤信夫 1986: 247）。本発表では、「にすぎない」にみられる「自己下位語関係」と価値評価について論じる。

（1）　人間は一本の葦にすぎない

（2）　人間は動物にすぎない　（佐藤 1986: 247）

（3）　「僕らはロック・シンガーにすぎないけれど、音楽の旅をすることによって、人々を幸せにすることができるんだ。」　（BCCWJ）

「にすぎない」と類似する表現として、「-すぎる」がある。「-すぎる」は動詞や形容詞、形容動詞などに後接し、否定的評価を伴うことが多い。

（4）　お前、飲みすぎだよ

（5）　これ甘すぎてもう飲めない／＃これ甘すぎておいしいね

「-すぎる」の否定形である「-すぎない」は肯定的評価（適度であるという評価）を伴うものが多い。

（6）　あなた、飲みすぎないでね

（7）　これ甘すぎなくて、おいしいね／＃これ甘すぎなくて、もう飲めない

また、「にすぎる」も否定的評価を示す場合が多い。

（8）　「よく見れば」など説明にすぎるからいらない、という意見がありそうだが、そうではない。　（BCCWJ）

（9）　ほとんどすべてのことを石のテーブルに求心させるそのまとめかたには、ちょっと情熱的にすぎる美化があるんじゃないかしら？　（BCCWJ）

一方で、その否定形である「にすぎない」も否定的な評価を下すときに用いられることが多い。

（10）　科学者が一〇年計画にはフィロソフィーがないとか、作文にすぎないとか評したのは、彼らが、それは基礎科学の振興に十分に意をはらっておらず、　（BCCWJ）

（11）　ネコはネコにすぎないのだから、お手なんてできないよ

（12）　＃ネコはネコにすぎないのだから、何でもできるよ

「-すぎる」には否定的評価が伴い、その否定形の「-すぎない」は肯定的な評価が伴うのに対し、「にすぎない」「にすぎる」はどちらも否定的な評価が伴いやすいのはなぜなのだろうか。

以下、2 節で「にすぎない」に関わる「自己下位語関係」と自己比喩についての先行研究を紹介する。3 節でカテゴリーの分割と評価の対応について述べ、「にすぎる」の否定的評価について論じる。4 節で「かけがえのなさ」という概念を導入し、「にすぎない」の否定的評価が、かけがえのなさの無視に由来することを示す。本発表を通して、期待からはみ出ることで現れる「にすぎる」の否定的評価と「にすぎない」の否定的評価は全く別の評価軸に基づくものであり、異なる評価軸を用いているためにどちらにも否定的評価が現れるのだと主張する。

2. 自己下位語関係と自己比喩

佐藤（1986）において、「にすぎない」は「意味の弾性現象」を伴い、自己下位語関係に基づいた表現であることが示唆されている。自己下位語関係とは、例えば「動物」という語が植物と対立する仕方で理解されるときは「人間」を含む（「動物$_1$」）のだが、「動物」が「人間」と対立するときはその下位分類としてより狭い意味を持つ（「動物$_2$」）関係のことを指す（佐藤 1986: 250）。

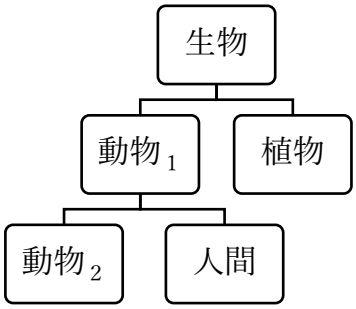

図 1　自己下位語関係（佐藤 1986: 250 図 10 を基に作成）

例えば、(2) の「人間は動物にすぎない」における「動物」は「動物$_1$」に相当するとみなされうる。しかし、正確には「動物$_2$」を考慮に入れた上での「動物$_1$」である（佐藤 1986: 251）。佐藤（1986: 251）はさらに「うっかりすると「動物$_2$」に引きずられそうな概念を、用心しながら「動物$_1$」に限定しようとしている」と述べる。(2) における「動物」の概念は「動物$_1$」と「動物$_2$」の間で「弾性化」しているのである。このように佐藤は、「X は Y にすぎない」は意味が伸び縮みする「弾性現象」を弾性状態のまま実現する表現の一例であると述べる。つまり、「X は Y にすぎない」は図 1 に示す自己下位語関係が意識されるような、意味の伸縮を体現しているのである。

佐藤（1986: 266）は「弾性運動を、私たちは語の意味の《自己転義》性あるいは《自己比喩》性と呼ぼう」と述べる。「伸縮が限度を超えると、意味はこわれてしまう（佐藤 1986: 273）」と述べていることからもわかるように、同一性を保ったカテゴリーにおける「弾性」が自己比喩なのである。語の意味の微妙な伸縮、拡大、縮小は古典的な「提喩」現象に極めて近く、「自己比喩」は「自己提喩」とも言い換えられる。例えば、「父親はいつまでたっても父親なのだ」のような表現も「同一の表現に対する自己提喩の現象」であるとしている（佐藤 1986: 287-295）。森（2016: 94）は、佐藤の用語である「自己比喩」は提喩能力が反映された言語現象であると主張している。

3.　カテゴリー内の分割と評価

「にすぎない」にみられる自己下位語関係は自己比喩の一種であり、それはネコとイヌのように異なるカテゴリー間の対立ではなく、「ネコ」のような単一のカテゴリー内で新たな区切りを設けるものである。類似する表現として坂原（2002: 3.2.3）が分析する「階層の否定と同質化トートロジ」がある。（13）は「真のネコ」であるためには、ネズミを捕ることが必要だということを表している（坂原 2002: 112)。ネコのカテゴリーを「ネズミを捕るネコ」と「ネズミを捕らないネコ」に分割しており、もしそれに有益さの観点が導入されると「ネズミを捕るネコ」は「ネミを捕らないネコ」より高く評価されることになる。ネコの「ネコらしさ」が有益さの観点から決定されるなら、「ネズミを捕るネコ」は「ネズミを取らないネコ」よりもネコらしいネコになる（坂原 2002: 111)。また、坂原（2002: 113）によると（14）は（13）で分割した基準は不適当だという主張をしているとされる。

（13）　ネズミを捕ってこそ、ネコはネコだ　（坂原 2002: 112）

（14）　ネズミを捕らなくても、ネコはネコだ　（坂原 2002: 113）

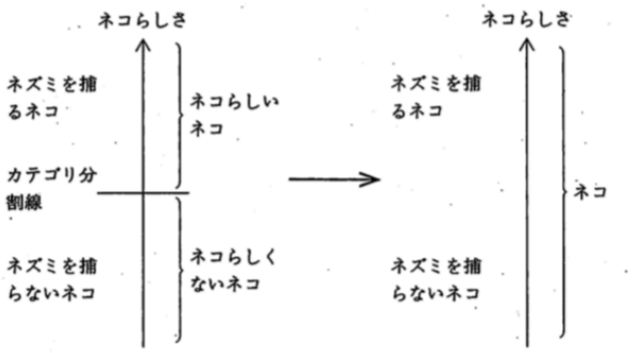

図２「ネズミを捕らないネコは、ネコではない」が提案するカテゴリ分割と、トートロジ「ネコはネコだ」によるカテゴリ分割の廃止（坂原 2002:114）

（13）は図２が示すように「らしさ」のスケールを前提とし、ある概念を分割する。そして、（14）は分割によって生じた差異を否定する。「差異を否定する」ことは、坂原（2002: 199）が「境界線を廃止するだけでなく、スケールそのものを廃止してしまってもよい」と述べることからもわかるように、スケールを意識すること自体を拒否すると言い換えられる。（14）のような表現が「分割を否定するものである」とするならば、もともとない区別を否定あるいは無視することは不可能であるために、（14）を発話するときには必ず（13）の区別を暗に意識していることになる。

「にすぎない」を用いた（15）の文でも、何らかの基準で規定された区別をなくすのだと考えることができる。飼い猫のタマとタマ以外のネコ（ネコ$_2$）を区別することは可能である。一方でタマはイヌかネコかの区分ではネコであり、ネコ$_2$とタマはどちらもネコ$_1$に含まれる。前者の区別を意識しながら、後者を伝えるということであるとするのなら、（15）はタマとネコ$_2$の区別を拒否する表現であるとも言える。

（15）　タマはネコにすぎない

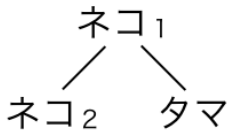

図３　自己下位語関係（ネコ）

河西（2017: 40）は、カテゴリーに関する境界として、異なるカテゴリー間に引かれる境界を「外なる境界」と呼び、同一カテゴリーの内部に引かれる境界を「内なる境界」と呼んでいる。自己比喩は河西の分類では「内なる境界」によって境界が引かれるものである。そして、河西（2017: 第２章）は内なる境界が引かれることで評価的意味が加わる例が多く存在することを指摘し、カテゴリーの内部でより中心として限定された意味の方が肯定的評価を得ると考えている。彼はカテゴリーの中心には肯定的評価が、周縁には否定的評価が伴うと主張する。例えば、「母親らしい母親」にはプラスの価値評価が、一方「母親らしくない母親」にはマイナスの価値評価が与えられる（河西 2017: 98）。確かに、「中心」には肯定的評価が伴い、「周縁」には否定的評価が下されやすいとは言えるだろう。例えば、（16）の下線部を（17）のように入れ替えると不自然である。

（16）　主に、市場のことを、社会・経済・政治的な生活の組織化にとって、もっとも<u>中心的で</u>望ましい場と見なす考え方。　（BCCWJ）

（17）　＃主に、市場のことを、社会・経済・政治的な生活の組織化にとって、もっとも<u>周縁的で</u>望ましい場と見なす考え方。

「内なる境界」は図４のようにあるカテゴリーを「外なる境界」の内側（カテゴリーの内部）で中心と周縁に分割する。中心に近いほど、つまり、話者が中心とみなしたものに近ければ近いほど、肯定的評価が伴う。逆に、その中心から遠ざかるほど、否定的評価が伴う。

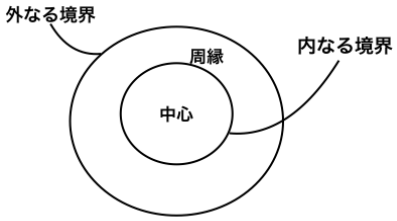

図４　外なる境界と内なる境界

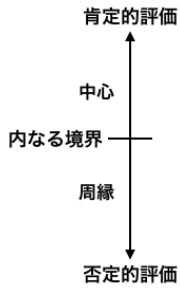

図５　中心と周縁の評価軸

（18）　日本人はとかくマジメにすぎるから、十働けばいいところを、ついつい十二も十三も働いてしまう。　（BCCWJ）

以上を踏まえて、「にすぎる」は、「内なる境界」をはみ出すことによる否定的評価が伴う表現であると考える。例えば、「日本人はマジメだ」であれば、肯定的にも否定的にも解釈可能であるが、（18）は否定的に解釈される。「にすぎる」は、発話者が期待する「マジメ」の境界を超えることによる過剰を表している。河西の議論と照らし合わせると、日本人のマジメさが話者の期待する範囲である「中心」から逸脱しているために、否定的評価が伴うと言える。

一方で、「にすぎない」に否定的評価が伴うという事実は、河西の議論に整合的ではない。「にすぎない」は、「ただ…でしかない」と言い換えられ、「限定する」意味を持つとも言える。もし、「ネコにすぎない」における「ネコ」は本来こうあるべきだという期待の範囲にのうちに限定されているのであれば、「あるべき姿のネコ」に限定されることとなり、河西の主張の通りであれば肯定的評価が伴うはずである。さらに、「にすぎない」が、否定的評価が伴う「にすぎる」の否定形であることを踏まえると、肯定的評価が伴いやすい表現であってもよいはずである。しかし、例えば（19）は「この人」は単に「ひと

りの男性」であることに加えて取るに足らない存在であることを伝えており、否定的な評価を下していると言える。「にすぎない」の否定的評価はどのように説明されるべきなのであろうか。

（19）　この人は広い世界のなかの、ひとりの男性にすぎないのよ。　（BCCWJ）

4.　かけがえのなさ

佐藤（1986: 267）は、「たんなる Y にすぎない」は「妙に意地の悪い効果」を表しがちであるが、「たんなる Y ではない」は「好意的なニュアンス」を持ちやすいと述べる。その理由については「なかなかの謎」としながら、「本題からそれている（佐藤 1986: 268）」と積極的に分析をしていない。

佐藤（1986: 255f.）は、（20）が（21）を対立する相手として想定できると述べている。『愛犬の友』を買うような愛犬家にとって、もしくは、犬に恐怖を抱いている人々にとっては「犬」は有標である（佐藤 1986: 256）。そういう人々の感じ方が世間にありうることを前提とした上で（20）は犬の有標性を否定している（ibid.）。

（20）　犬も（所詮は）動物にすぎない　（佐藤 1986: 255）
（21）　犬はたんなる動物ではない　（佐藤 1986: 255）

この「有標性」が「なかなかの謎」の正体ではないだろうか。野矢（2016: 214）は「目の前のものごとをどう記述するかは、そのものごとに対してどのような関心を、どの程度持っているかに依存している」と述べる。例えば、電球が切れたら単に買い換えるだけで、切れてしまったその電球を想い、涙することはまずないだろう。一方で、飼い犬の「ポチ」は同じ犬でも他の犬とは異なる特別な存在として区別する。犬を長年飼っている人は犬について詳細に記述することができる。また、飼っていた愛犬が最近死んでしまった人は犬を見ると悲しくなったり、野良犬に噛まれたことはある人は恐怖を抱いたりする。彼らの犬を見る目は犬か猫かの区別さえつけばいい人のものとは明らかに異なっている。本発表ではそのような関心の高まりに伴う詳細な認識を「かけがえのなさ[1]」と呼ぶ。

百科事典的意味観（cf. Langacker 2008: 39f.）では、ある語彙項目の意味は単なる属性の束ではなく、プロトタイプを中心としたある知識の総体であると考えられている。野矢（2011, 2016）はプロトタイプにまつわる概念を「典型的な物語」と呼んでいる。例えば、典型的な物語における鳥は、ふつうの森や水辺に生息していたり、空を飛んでいたり、あるいは、ふつうの人にカゴの中で飼われていたりする。我々は鳥がいきなりワンワンと鳴いたり、料理を作ってくれたりすることはないことを暗に了解している。「鳥」という概念には、我々が鳥に対して持っている社会的な通念の了解が伴っている。そして我々は、ある対象を知覚するとき、そこに典型的な物語を読み込むのである。

そして、ある対象に「かけがえのなさ」を見出した時、その対象は「典型的な物語からはみ出していく」ことになる。野矢（2011: 406f.）は、「目の前のものにとりたてて関心を抱いていないのであれば、私はただその典型的な物語の世界の内にとどまっているだろう。しかし同時に、典型的な物語を食い破り、そこからはみ出していく実在性も、我々は確かに受け止めているのである」と述べる。つまり、我々

[1] 野矢（2019: 140）は「個別性＝かけがえのなさ−大事に思う気持ち」という図式で説明をする。本発表では、「大事に思う気持ち」というのは、プラスにもマイナスにも存在するものであり、「強い関心」であると考える。

はある対象を知覚するとき、そこに「典型的な物語」を読み込むのと同時に、ある対象は典型的な物語を超える詳細や特殊性を持つということも知っている。その対象が持つ詳細をどれだけ、どのように記述するのかは、関心の度合いによる。また、そのような知識の二面性、「典型的な物語」と「かけがえのなさ」を誰もが、何に対しても持つことがあり得るということも知っているのである。

「にすぎない」の否定的評価は、この「かけがえのなさ」を拒否する表現であるから生じる。(20) は (21) を否定するからこそ否定的な評価を下す表現となる。我々は「理想的である」こととは別に、「かけがえのなさ」も世界に期待している。「にすぎない」が拒否するのは、無関心に「典型的な物語」としてのみ見るようなカテゴリー化と、「かけがえのなさ」を見出し強い関心を持ってカテゴリー化することの区別である。「典型的な物語」は「初期設定（デフォルト）」であり（野矢 2011: 407）、カテゴリー化する限り常に読み込まれるものである。一方で「かけがえのなさ」は「強い関心」がなければ生じ得ず、「単なる犬ではない」という表現からもわかるように「単なる犬」を基準として初めて意識できるものである。図６で示すように、「X は Y にすぎない」はスケールの分割を拒否する。分割をしないということはすなわち「かけがえのなさ」の存在を無視するということになる。そのため「X は Y にすぎない」は「典型的な物語」側のカテゴリー化を強く意識したまとまりとして捉えられる。

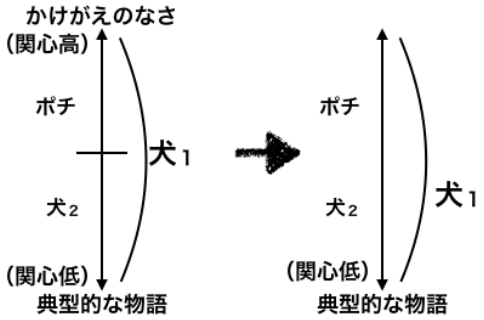

図６　かけがえのなさを無視するスケール

「にすぎない」で用いられているのは「典型的な物語・かけがえのなさ」という評価軸、すなわち「特別かそうではないか」という評価軸なのである。犬に噛まれた経験によって抱く犬への嫌悪感もある意味では特別であり、関心が高いという意味で肯定的に捉えられる。この評価軸は、河西が提示する「中心」と「周縁」のような「理想である」ということを肯定的に評価する軸とも異なる。我々のカテゴリー化には、複数の評価軸が関与しているのである。

例文引用

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）「少納言」http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/（2019 年 10 月 9 日最終確認）

参考文献

河西良治（2017）『人生の意味論: 価値評価をめぐって』東京: 開拓社./佐藤信夫（1986）『意味の弾性』東京: 岩波書店./坂原茂（2002）「トートロジとカテゴリ化のダイナミズム」大堀壽夫（編）『認知言語学 II:カテゴリー化』東京: 東京大学出版会./野矢茂樹（2011）『語りえぬものを語る』東京: 講談社./野矢茂樹（2016）『心という難問 空間・身体・意味』東京: 講談社./野矢茂樹（2019）『そっとページをめくる――読むことと考えること』東京: 岩波書店./森雄一（2016）「自己比喩をめぐって」『成蹊大学文学部紀要』51: 87-97./Langacker, Ronald W.（2008）*Cognitive Grammar: A Basic Introduction.* New York: Oxford University Press.